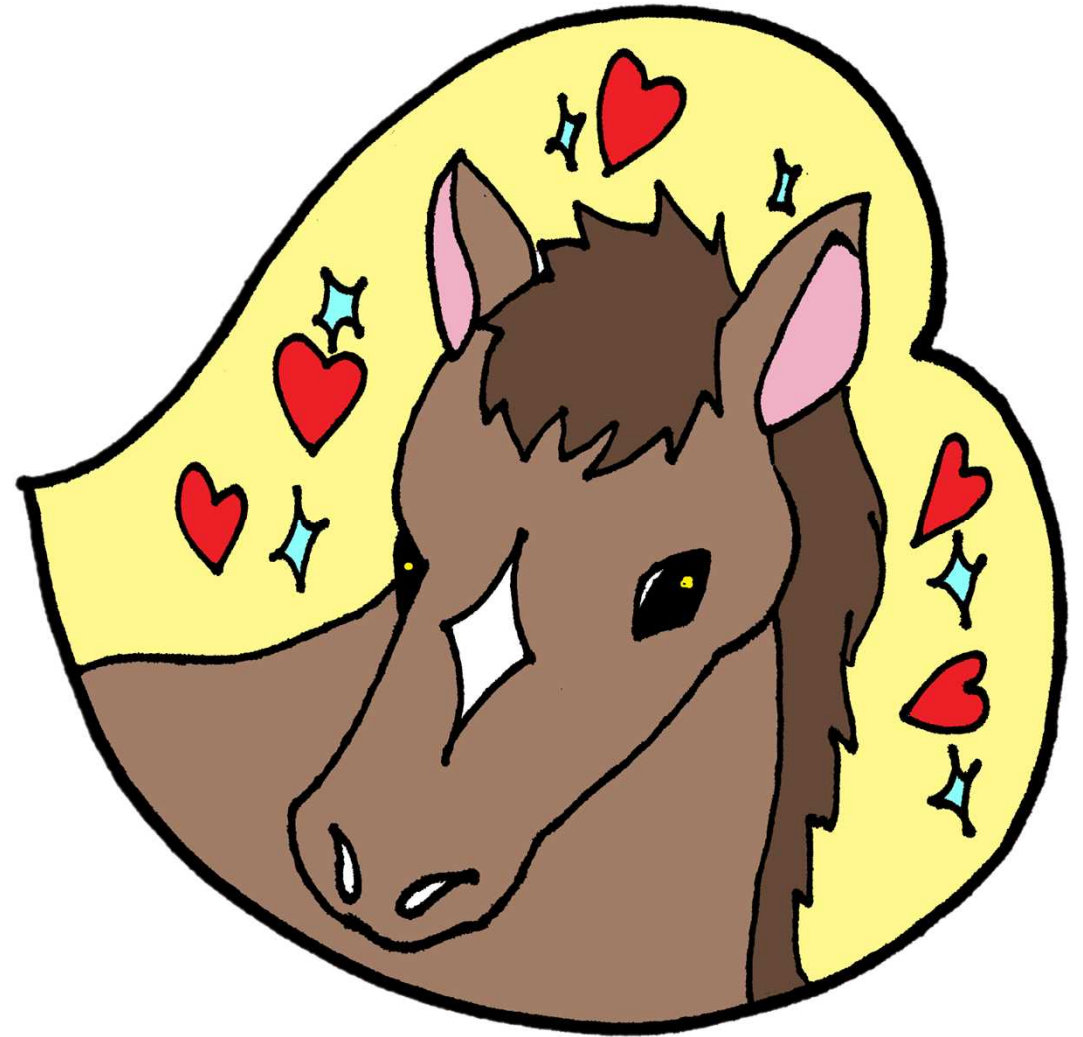


名馬の恋 (標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：みやかわ みなみ

昔、ある村に左衛門という名前の方がいました。
お金持ちで、広い屋敷にたくさんの使用人をかかえて暮らしていました。
馬に乗ることが好きで、名馬を飼っていました。
奥さんも美人で、夫婦仲良く暮らしていましたが、子供がいませんでした。



二人で相談をして、馬頭観音様に
『どうか、子供を授けてください』
と、三、七、二十一日の願かけを
しました。

すると、子供を授かることができました。

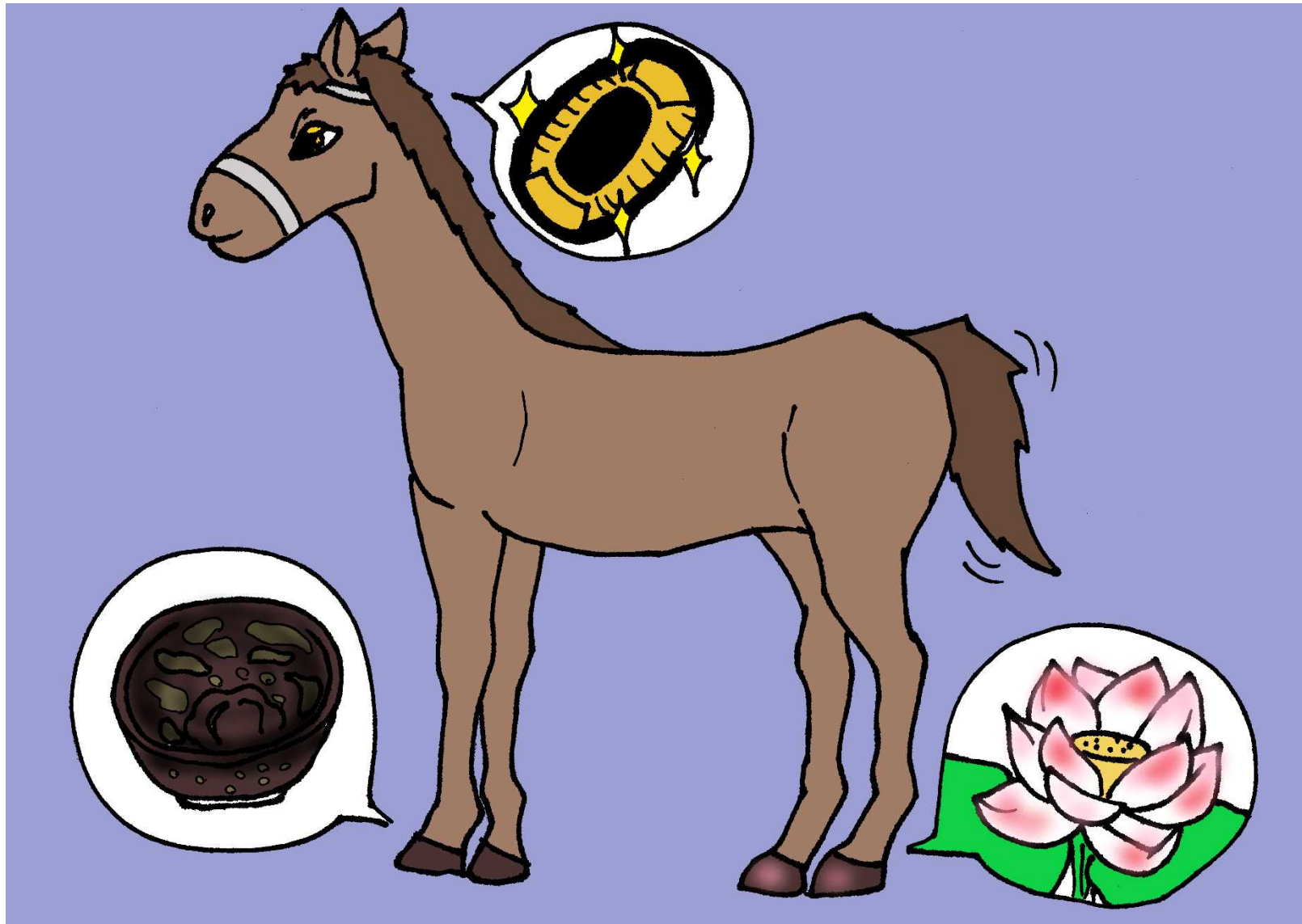


生まれてきたのは女の子で、何もかもがかわいい子でした。
左衛門と奥さんは、とても喜んで、この子を「キヌ子」と名付け、大事に大事に
育てました。
キヌ子が十五歳のとき、馬喰う（ばくろう）が来て、一頭の、2歳の仔馬を見せて
くれました。



左衛門とキヌ子は、一目でこの馬を気に入り、大金を払って買いました。
思った通りのいい馬で、「せんだん栗毛」と名付けました。これ以上の馬はこの世にいないと思えるような立派な馬でした。

前足の蹄（ひづめ）は、天目茶碗を伏せたようで、後ろ足の蹄は蓮華（れんげ）の花のようでした。目は大判のように光っていました。

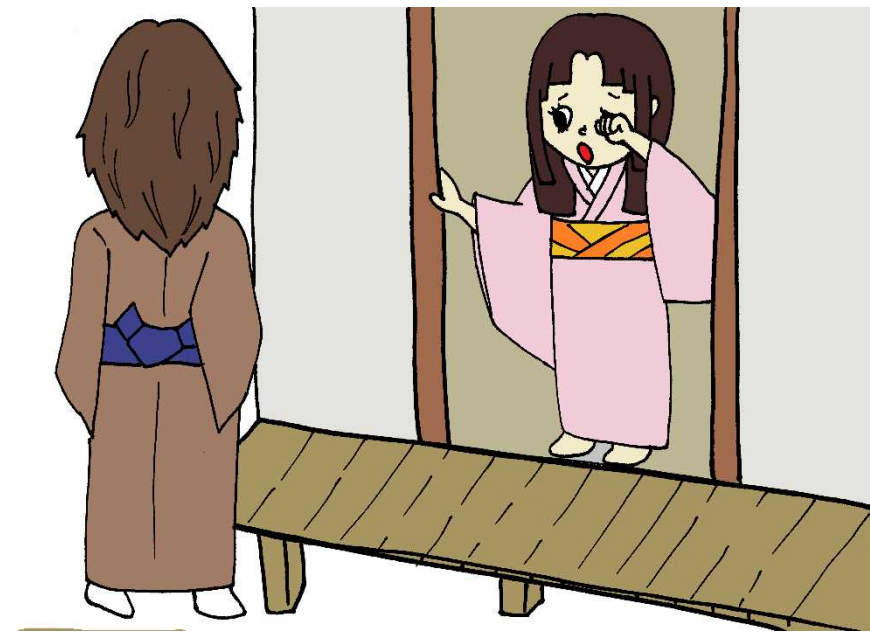


キヌ子は十六歳になり、せんだん栗毛は三歳の馬になりました。
お金持ちなので、金蒔絵の鞍（くら）に、銀の轡（くつわ）、綾染めの手綱（たづな）を付けて、キヌ子を上に乗せてくれました。
キヌ子は嬉しくて嬉しくて、有頂天になり『どこへ行っても、うちのせんだん栗毛みたいな馬はいない。もし、これが馬でなくて人間なら、お婿さんにしたいくらい。ねえ、せんだん。私のお婿さんになるでしょう?』と言いました。



それから、せんだん栗毛を厩（うまや）へ入れて、キヌ子は自分の部屋へ戻りました。

夜中になると、庭でトコトコという足音がして、雨戸の外から『キヌ子、キヌ子』と呼ぶ声がしました。キヌ子は目を覚まして、こんな夜中に、誰が私を呼んでいるんだろうと思って、起きて雨戸を開けてみました。すると、庭に一人の立派な若者が立っていました。面長で、髪の毛がふさふさして、大きな優しい目で、容姿端麗（たんれい）でいい男でした。



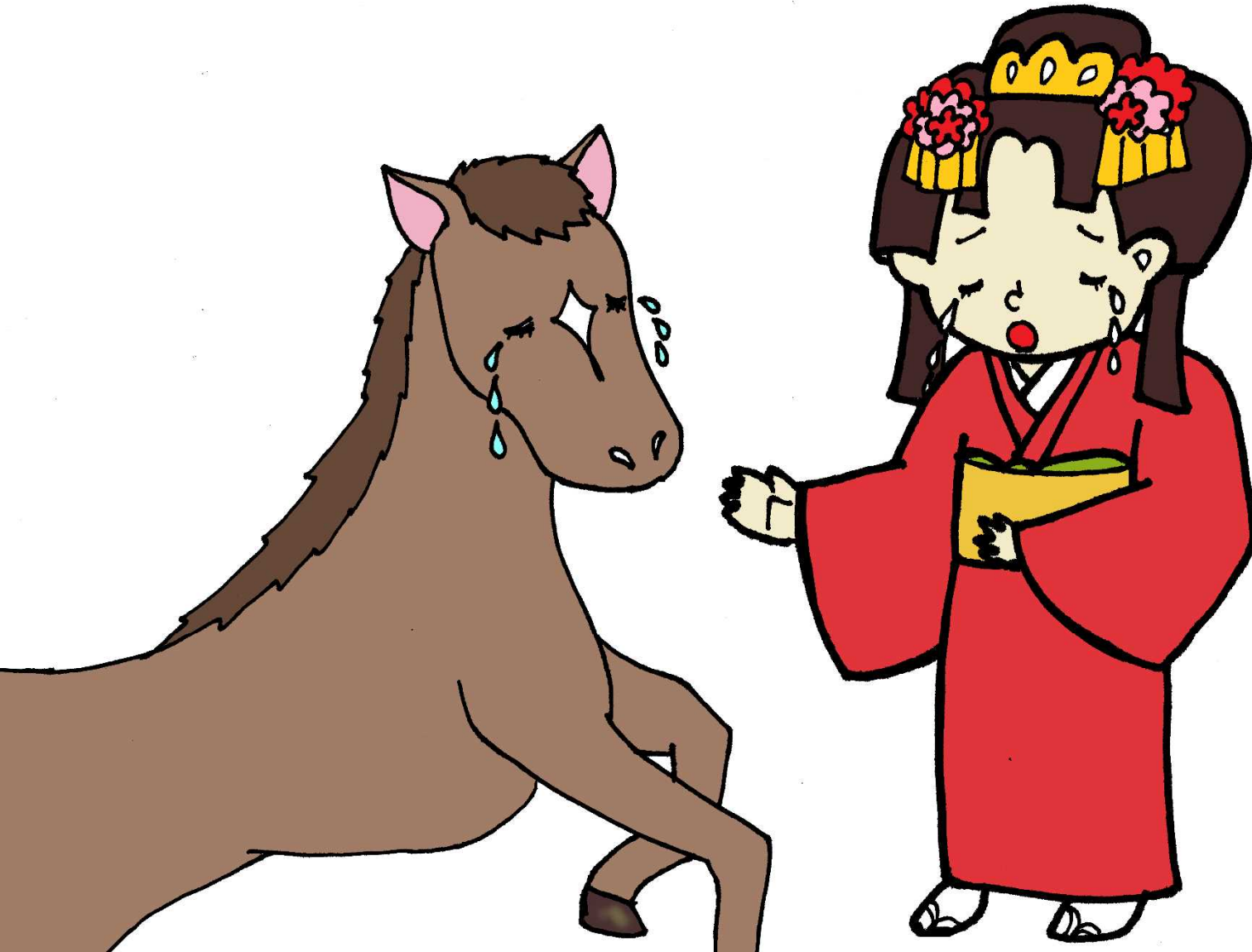
その若者は、燃えるような瞳で、キヌ子をじーっと見つめていましたが、しばらくして一言『俺はせんだん栗毛だ』と言って、庭を横切り厩の方へ向かうとスーッと消えました。

次の日から、せんだん栗毛は病気になってしまい、何も食べなくなっていました。
左衛門や奥さん、使用人たちも、心配をして、笹や芒（すすき）、葛の葉などを取ってきて、
食べさせようとしたのですが、何も食べませんでした。
キヌ子が近くへ行行って、鼻をなでて、首を抱いて、人参の葉を食べさせたら、少し食べました。
それから、三日、五日、、一週間が過ぎると、せんだん栗毛はすっかり痩せてしまいました。



八日目の晩、キヌ子はなかなか寝付けず、夜中に厩へ行ってみると、せんだん栗毛は前膝を立てて、首をキヌ子の方へ向けて、ポロポロ涙を流して、鼻さきでキヌ子の顔をなでました。それを見たキヌ子も、思わず涙をポロポロとこぼしました。

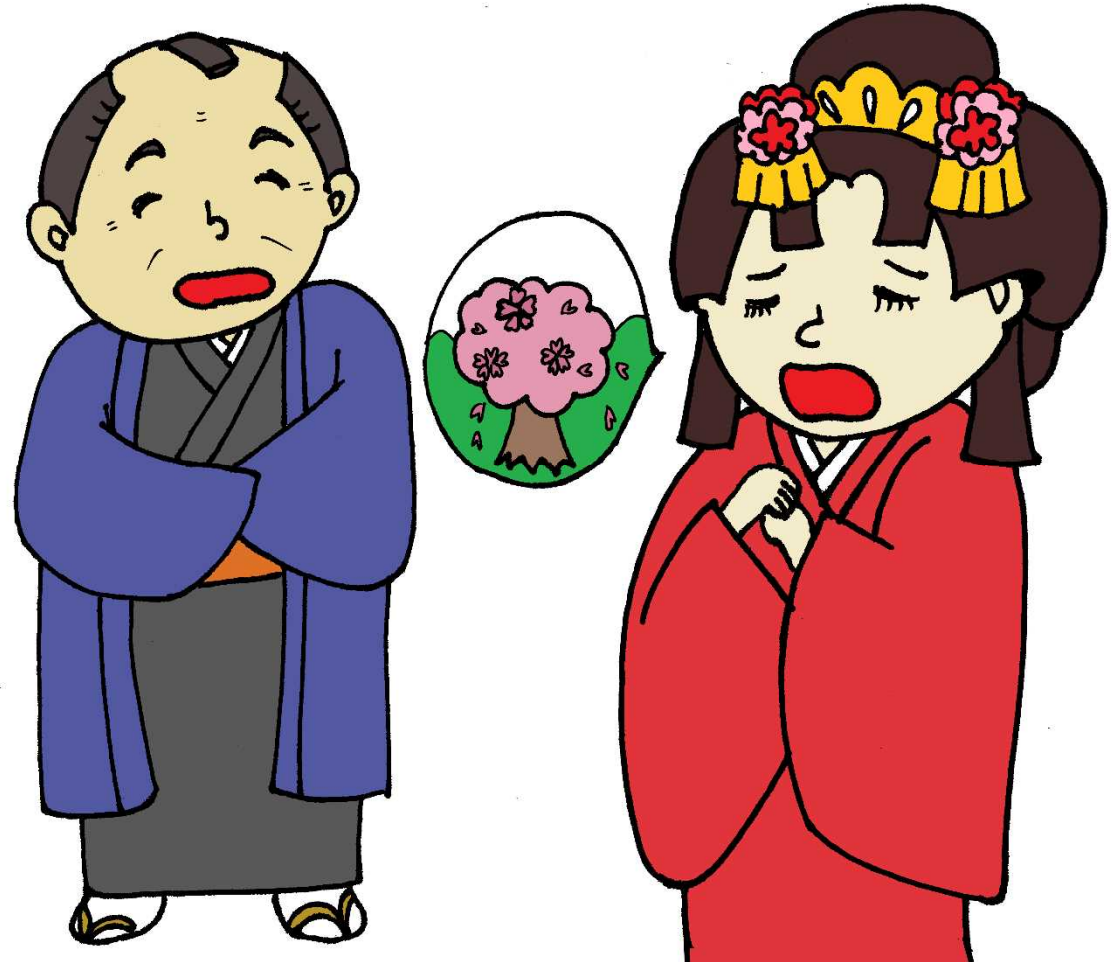
次の日の朝、せんだん栗毛は、死んでしまいました。



左衛門はあきらめて、使用人へ『せんだんを山へ埋めて来い』と言いました。

次の年の五月の節句、キヌ子は『お父様、お願いがあります。せんだん栗毛を埋めた山桜のところへ花見に行きたいので、連れて行ってください』と言いました。

左衛門も、ふさぎ込んでいるキヌ子も、花見へ行けば気が晴れるのでは？と思って、酒や肴の準備をして、人をたくさん引き連れて、山へ花見に行きました。



山奥まで来ると、使用人が『キヌ子様、ここがせんだん栗毛を埋めた所です』と言いました。キヌ子は、そこへ塔馬（とうば）を立てて、灯明（とうみょう）をつけて、線香を焚いて拝みました。その後、重箱を開いて、せんだん栗毛を供養する酒盛りをしました。やがて、酒盛りも終わって、後片付けをしているとき、キヌ子は一人、大きな桜の木の前に立って『せんだん、せんだん、もう一度会いたいよ』と叫びました。



すると、急に天気が変わって、雨や風が激しくなり、雷がピカピカ、ゴロゴロと鳴って来ました。そして、天気がおさまったとき、空の一角に、五色の雲が現れて、その雲はキヌ子の体をフワッと包んで、そのまま天へ昇って行ってしまいました。使用人たちは、慌てて手をさしのべたり、竿を差し出したりしましたが、どうすることもできませんでした。あっという間の出来事でした。



戻って来た人たちから、その話を聞いた左衛門と奥さんは、すっかり力を落としてしまい、毎日泣いて暮らしました。

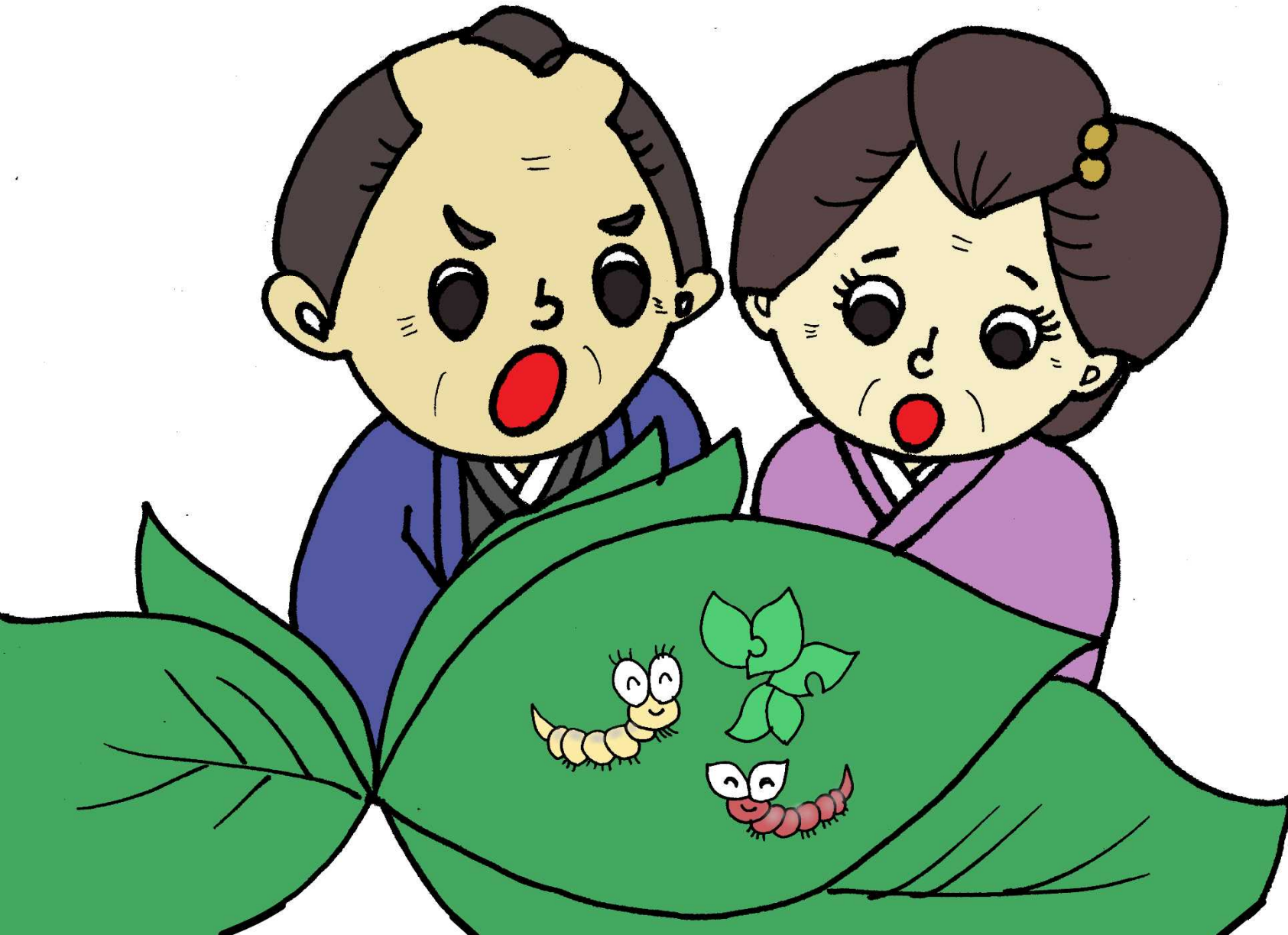
仕事も手に着かず、哀しんでばかりいたので、だんだんと収入もなくなり、とうとう、財産をなくしてしまいました。

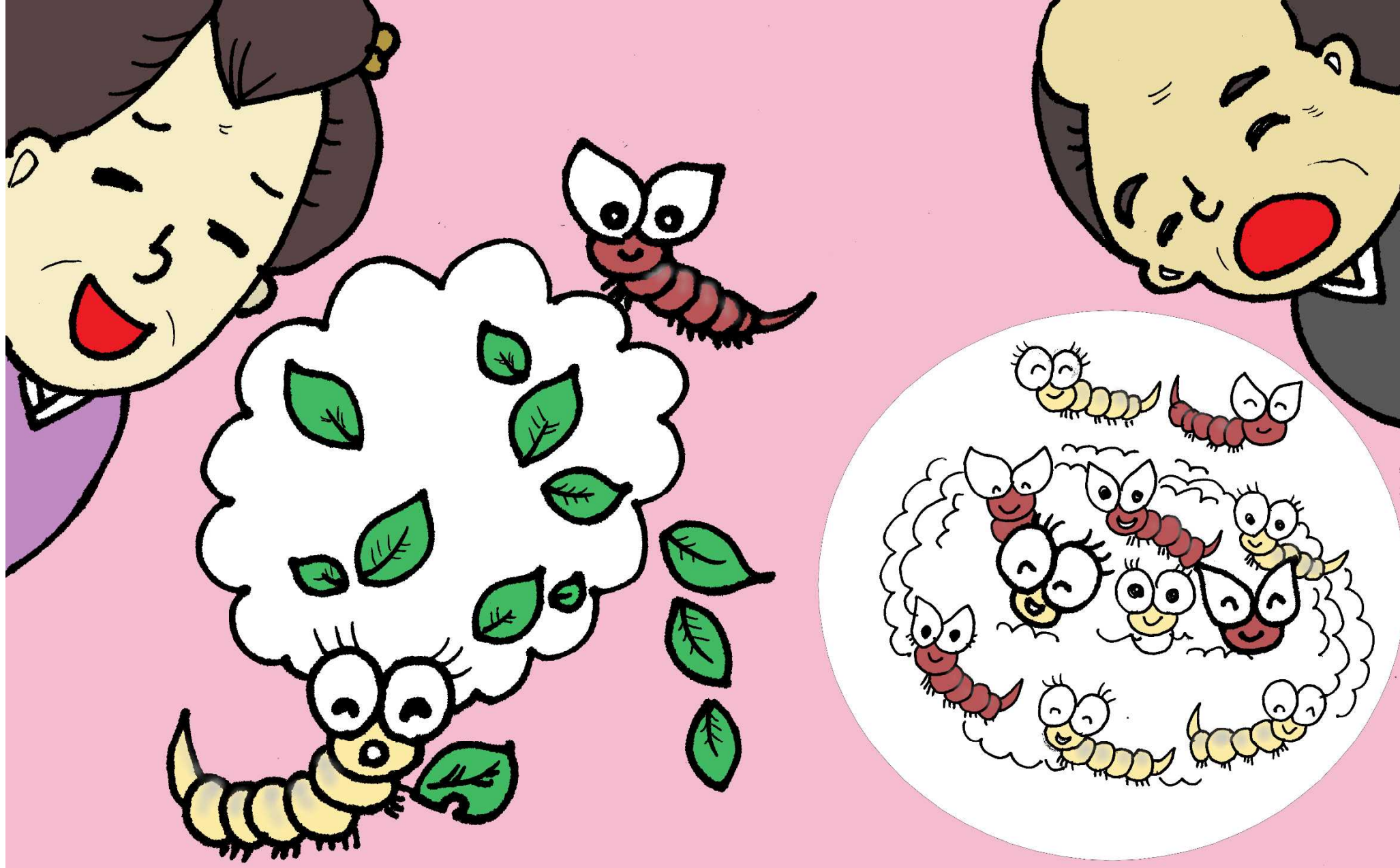
それから二年が過ぎる頃には『これは前世から決まっていた、運命だったのかもしれないな』
と、ようやく受け入れることができました。



ある日、夫婦で庭を歩いていると、草が茂っている坪庭の桑の木に、赤い虫と白い虫がいるのを見付けました。

赤い虫の顔を見ると、せんだん栗毛に似ていました。白い虫を見ると、キヌ子のような顔でした。不思議な事もあるものだなあ。と思って、桑の枝を折ってあげると、赤い虫と白い虫は葉をシャリシャリと食べました。





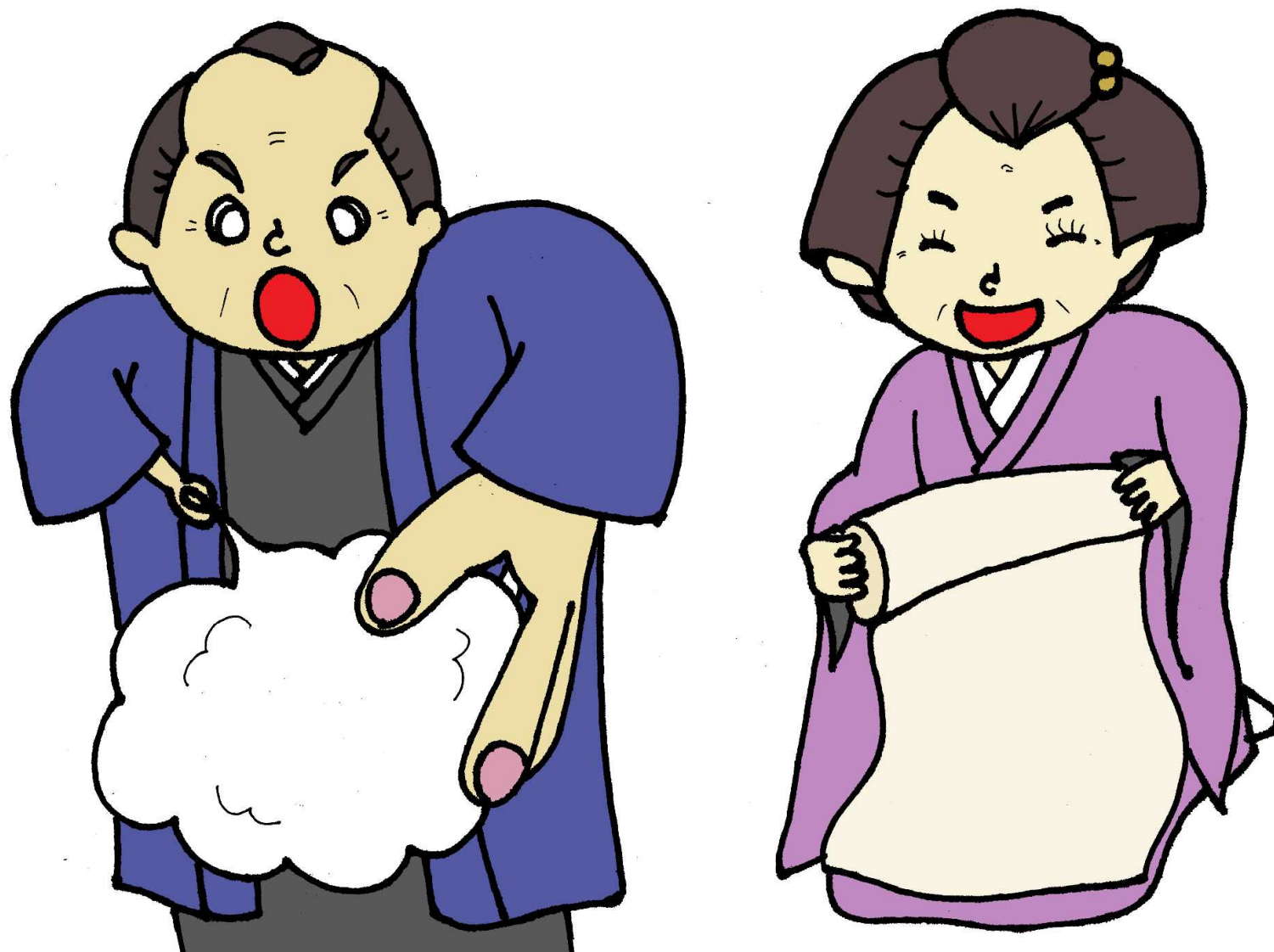
それから、毎日、左衛門と奥さんは、桑の葉を集めて、刻んで食べさせました。
すると、その虫は、たくさん食べて大きくなって、巣を作りました。

その巣から、キヌ子とせんだんに似た虫が次々出てきました。
左衛門と奥さんは、それらにもせつせと桑の葉をとってきて食べさせるのに忙しくなりました。

その巣は、フワフワとした白い莢（さや）で、その莢から外側のフワフワの部分引っ張ってみると、その糸はとってもいいものでした。その糸で織物を織ってみると、まあ、スベスベとしたとてもいい肌触りをしていました。

左衛門と奥さんは、虫を増やして、その莢からとった糸を染めて織物にしてみると、評判を聞いて売って欲しいという人も居ました。

そこで、左衛門はその布に「絹」という名前を付けて売り出すと、飛ぶように売れたそうです。



二人は毎日汗を流してせっせと働きました。お金も入ってくるようになり、元の使用人も一人、二人と戻って来て、一年も経つと元のような生活が出来るようになりました。せんだん栗毛とキヌ子は、両親を哀しませたせめてものお詫びにと、絹を授けたのかもしれない。

時が経つと、この夫婦に赤ちゃんが出来て、親子三人幸せに暮らしました。



おしまい。